

# 座談会記録

出席者 古原宏伸氏 (奈良大学名誉教授)

山岡泰造氏 (関西大学名誉教授)

尾崎蒼石氏 (日展委嘱・日本篆刻家協会理事長)

曾布川寛氏 (京都大学名誉教授)

西上 実氏 (京都国立博物館名誉館員)

司会 弓野隆之 (大阪市立美術館学芸課長代理)

**弓野** 本日は橋本コレクションに関わって研究やコレクションをなさってこられた先生方にお集まりいただきました。橋本先生生前のコレクションの様子ですか、お宅で開かれていたという研究会のこと、あるいはそれぞれの作品に対する思い出など、我々が普段全く知ることができない話を語っていただきたいと思ひます。

それに先立ちまして、アメリカご在住のジェームズ・ケーヒル先生から、お手紙を頂戴しております。ハワイ・パシフィック大学の亀田和子先生に託されたもので、亀田先生が日本語に訳して下さいました。それを先に読ませていただきまして、それから座談会に入りたいと思ひます。**ケーヒル先生書簡** 本日開催のシンポジウムご参加のみなさまに、ご挨拶申し上げます。

大阪市立美術館における、橋本コレクション展覧会の情報を得て、かつて慣れ親しんだ中国絵画作品がウェブサイトのポスターに掲載されていることを知りました。これらの作品は、もう六十年位前になります。一九五三年の昔日に私を連れ戻してくれました。それは、フルブライト留学生として京都に滞在中、当時、指導教官であった島田修二郎先生に同行して、初めて高槻の橋本末吉氏のご自宅へ、コレクションを拝見に行ったときの思い出です。

その後、何度も橋本家へお伺いして、数々の絵画作品を調査させていただき、カラー・スライドを制作しました。私が特に注目した呉彬の作品については、調査中に、その掛け軸があまりにも長かったため、橋本

家の壁に掛けることができず、素晴らしい作品の天の部分しか撮影できなかったフラストレーションを今でも鮮明に覚えています。

また、島田先生は、橋本氏がコレクションに含まれる、一群の作品を蒐集した際のエピソードを話して下さいました。それは、富岡鉄斎と交遊し、九華印室の印譜で知られる篆刻家・桑名鉄城のコレクション入手に関する情報でした。住友寛一氏に購入された石濤や八大山人による数点を除いて、橋本氏は、桑名コレクションの殆ど全てを受け継いだのです。ちなみに、私は住友家へ渡った作品を、その後、旧住友家大磯別邸で拝見しました。

そして、さらに心に残っているのは、橋本氏が亡くなり、コレクションが東京へ移ったいきさつを耳にしたときのことです。橋本氏、桑名氏、島田先生、その他、日本の研究者とコレクターの方々が、アメリカやヨーロッパのずっと前から、明清絵画の価値を見出し、蒐集・研究したことは、高く評価されるべきです。この場を借りまして、彼らの思い出を称え、シンポジウムのご成功を祈りつつ、一言、付け加えさせていただきます。高齢のため、長旅は断念しましたが、本日、私の心はみなさまと共にあります。

ジェームズ・ケーヒル

二〇一二年七月十七日

**弓野** 橋本先生のごところに調査にいらして、著名な研究をいくつも残されましたケーヒル先生から、以上のようなお手紙を頂きました。

まず、お一人ずつ橋本コレクションとの関わりについて二言三言お話しただきたいと思ひます。古原先生から順にお願いいたします。

**古原** 後程、スライドを使ってお話するつもりです。ただ、今日一番先にお話になった橋本太乙さんに初めてお目にかかった当時は、太乙さんが中学二年生でしたか。高槻のお宅でした。今は堂々たる偉丈夫で目を疑うような成長ぶり、橋本さんも安心して自分の収集をお任せになったと思ひます。

**山岡** 小生は日本の絵画を専攻していたのですが、古原先生が京都の人



橋本太乙氏・西上実氏・尾崎蒼石氏・古原宏伸氏

文学部研究所に就職されて、人文へ遊びに来いということで、そこで中国の事をいろいろ教わりました。橋本さんのところにも連れて行ってもらいました。その後、曾布川君ともよく顔を合わせるようになりました。彼は初めから中国をやっていました。小生は中国のことは全然分からないので、橋本コレクションの何処がいいか、さっぱり分からなかったのですが、いろいろ工夫して、お付き合いするようになりました。橋本さんも、小生はあまり勉強の方には役に立たぬと思われたのか、作品を買う時に一緒に行こうと誘って下さったので、とうとう小生も骨董品を買う癖がついてしまいました。

**尾崎** 橋本先生との出会いは、かれこれ三十四年くらい前ですかね。三十六歳頃に、当時大阪中之島に東華堂という中国物産を扱う店がありました。従業員に藤井さんという人がおられ、僕が東華堂に行った折に、そんなに中国の絵が好きだったら、高槻に橋本先生という方がおられるので、一度是非行きましょう、という事で連れて行って下さったのが先生との出会いです。そんなご縁から今日ここに出席させて頂きました。どうぞよろしく願います。

**曾布川** 私が最初に橋本さんのところへ参ったのは、山岡さんに連れて行かれた時だったと思います。私が行く前から古原先生たちが月一回の中国絵画の研究会をしておられて、私はまだ駆け出しでしたので、最初の方は出席しませんでした。その後一九七〇年のこと、その年は台北の故宮博物院で大掛かりな中国絵画のシンポジウムがありましたので記憶

しておりますが、確か京都祇園の八坂神社石段下だったと思いますけれども、橋本さんから直接来るように言われまして、それから足しげく通うようになりました。ですからこの中では後の方の出席組になります。これまで私もあちこちの中国絵画のコレクションを見せていただきましたが、橋本さんのところでは明清絵画に関して随分勉強させていただきました。

**西上** 私は今年の三月まで京都国立博物館に学芸員として勤めておりまして、三十一年半ほど勤めておったんですけれども、一九八〇年十月に京博に入りまして、今建替え工事中の新館で、最低でも一年に十回かそれ位ですね、毎月展示替えをしまして作品を並べて平常の展示をやっておりました。ただ、割と狭い部屋を中国絵画のためにもらっていたのですけれど、並べますとどうしても作品が足りない。京博の場合は上野理一氏収集の有竹斎コレクションが中心になっておりまして、そこそこ明清の書画も揃ってはおりましたけれども、巻物といえますか図巻類が少ないものですから、その部屋を一年通して埋めていくことができない。そういう悩みを抱えておりました。それからまた曾布川先生の方からも「大体いつも同じような物を並べていて見飽きた。もつと新しい物を出せ」と言われておりました。そういう風に悩んでおりました。

それから間もなくして、曾布川先生の方から、高槻の橋本さんを紹介するからということで連れて行かれまして、そこで初めて橋本末吉氏にお会いした訳でございます。その時に私は、「盲、蛇に怖じず」といいますか、京博には図巻が少ないもので、橋本さんが自慢しておられた石鏡の「探花図巻」を貸していただきたい、是非とも京博の展示室、中国絵画の部屋に出させていただきたいので、ということをお願いしました。その時はさすがに橋本さんはですね、とっさに表情が変わりまして、ちよつと暫く話の接穂がない事態に至りました。その時に曾布川先生が助け舟を出され、「とりあえずここでしつかり物を見て、それからまたよく考えたらどうだ」とおっしゃっていただきました。

それから間もなく、高槻のご自宅の方で勉強会という形の催しがござ

いましたので、私も参加させていただき、勉強させていただきました。それ以降はいろいろと展示のたびに貸出しもしていただいたんですけど、やはり京都国立博物館でも、もう少し中国絵画のコレクションの内容を充実させていかないといけないことを痛感いたしました。ここにおいでの方、山岡先生・尾崎先生、それから先程の講演の時に所蔵品が紹介されました宮津の多名賀さんの方からも作品を寄託という形でお預かりしまして、足りない部分を補っていく、そういう方法をとるようにしました。それと館でも多少購入費がございましたので、細々とではあります。それが作品を購入していきまして、それも先程の橋本太乙さんの、道具屋の言い値よりもリーズナブルな値に値切つてという話でございましたけれども、館の方でも予算が厳しいということ、向こうの言い値の三分の二位に値切つて購入することもございました。それから段々と集めていきますと、寄贈等もずんずんと増えていきまして、来館者に、ある程度各時代を通し、系統立てて中国絵画をご覧いただけるような、そういう展示になっていったかな、と思っております。ものをじっくり見るということと、やはり博物館・美術館では収集ということは大変なことでありますので、その辺にも意を用いるべきであることを橋本さんには教えていただいたのだな、と思っております。

**弓野** 橋本さんは研究者の皆さま方には快く作品をお見せ下さいましたし、博物館にもお貸し下さいました。さて、研究会の中心でもございました古原先生から、今話題にのぼりました「探花図巻」など、幾つかスライドを用意して下さいとお申し出が先にごございました。ここでそれを見ながら古原先生のお話を頂きたいと思えます。

**古原** 【図1…石鋭「探花図」】初めて橋本さんに会ったのが、朝日新聞社の創業百年の記念で、『東洋美術』という豪華本を五冊に仕立てて出版した時に、この絵を京博で撮影しました。その時の撮影に橋本さんがおいでくださったのが最初でした。これは重要文化財に指定されていまして、同じようなものがクリーヴランドの美術館にあります。これを指定する時に、文化庁にいた渡辺明義さんが、図巻を引き取りにき

て「お預かりするけれども、実際に重文に指定されるかどうか判りません」って言ったんですね。そしたら橋本さんが怒られて「誰がこっちら頼んでやった」と言ったそうです。それは橋本さんから聞きました。気性が激しかった方ですね。さっきの手紙によるとケーヒルさんなんかは「私のお蔭でこのコレクションが世界的に有名になったんだ」と言う。「むしろそれで迷惑しているんだ」と答えられたそうです。また終戦直後に、神棚をはずしてきて庭で叩き壊したっていうんです。橋本さんは株で大損害をされた。「日本が負けることは判っていたけれども、こんなに早いとは思わなかった。神様はいったいもう少ししっかりしろ」とおっしゃったそうです。ただし、そういう気性の激しさっていうのは、私には一度も向けられたことがなくて、好き嫌いは人によってはあつたんですけど、私には終始穏やかで、声をあらげるとい



図1 石鋭「探花図」部分 橋本コレクション

ことは一度もありませんでした。

【図2…金農「墨梅図」(右)、

【図3…金農「墨梅図」(左)】両方とも橋本コレクションで、金冬心、金農という揚州八怪の先頭に立っていた有名な画家なんです。揚州八怪というのは自分のブランド、例えば金農でいえば墨梅であるとか、汪士慎も墨梅だとか、そういうのを確立することを競って、おのれの商品のブランド化を急ぎました。で、この右側の金冬心も、私は自信がありません。正直判らない。帰りがけに後ろから橋本さんが「この題は何て書いてあるんで

しようね」って、お訊ねになりました。「これは一番上は『氷』の象形文字です。『氷雪之交』、寒さにもめげないという意味ですけど」と申し上げました。橋本さんは「この字を読めたのはあなたが初めてだ」とおっしゃってました。始め橋本さんは私をどう呼ぼうかと迷われたんですね。『先生』としたら若いし、『さん』では失礼だと。この「氷雪之交」から私を『先生』と呼ぶようになられた。

【図4・魏之璜「山水図」(右)、図5・董其昌「傲米芾洞庭空濶図」(左)】その頃は人文研の駆け出しの助手でして、右も左も分らない。右側は橋本コレクションの魏之璜という山水画で、これも分からない、どうしてこういう画ができるんだろうかと、ずいぶん疑心暗鬼でした。私の恩師だった東京大学の米澤先生が「橋本さんは中国絵画の底辺の部分をすくって集めておられる」とおっしゃったんですが、どうしてどうして、底辺ではないんですね。その後中国の出版物を見てみると、右側の魏之璜という清初の絵描きですが、もう中堅どころの大家であったようです。

この白いところが私は分からなかったんですけども、この大阪市立美術館が持つている、およそ世界でも五本の指に入る燕文貴という北宋の名画の図巻がある。その巻末が、やはりこのように白く切り抜きになっていますね。私は一度仔細に見せてもらったんですけども、大阪美術館本は、後から補修した紙をこういう風に切り抜いて貼ってあった。左は董其昌という北京故宫博物院の絵ですけど、これとこのセットではじめて魏之璜が董其昌の絵を学んだということを知りまして「ああ、ほんとに一致した」と思いました。



図2 金農「墨梅図」橋本コレクション

【図6・沈銓「雪梅群兔図」(右)、図7・沈銓「雪中遊兔図」(左)】右が橋本コレクション、左側が住友泉屋博物館のもの、同じような画題ですが、沈銓という。以前、辻惟雄先生と長崎のコレクターの家を回ったことがあります。どのコレクター、スパーのオーナー、タクシー会社の社長さん、コレクションのあるどこの家にも沈南蘋があるんですよ。ところが全部落款が異なる。そうして絵も疑問ですよ。

右側が橋本コレクションにある一番若いときの沈南蘋、左側が最晩年の沈南蘋です。これも一人の画家が進歩するか、と云うんです。左側の右下に描かれている斜めの線、これは北宋の絵に「双喜の図」(崔白)という、兎と頭上の鳥とが相い呼応して見合うという絵の崖の絵とそっくりなんです。恐らくそれをとったものでしょう。右の絵が、私が見た現存する沈南蘋の絵で一番若いんですよ。そういうことを橋本さんに早く申し上げればよかったんですけども、報



図3 金農「墨梅図」部分 橋本コレクション

図7 沈銓「雪中遊兔図」 泉屋博古館



図6 沈銓「雪梅群兔図」 橋本コレクション



図4 魏之璜「山水図」 橋本コレクション



告せずに終わりました。そういう一つ一つのコレクション作品研究をすると、橋本さんは我が事のように喜んでくださったんですけど。親不孝でした。

【図8・虚谷「傲漸江山水図」(右)、図9・虚谷「金魚図」(左)】これも橋本コレクションです。両方とも。右は台北故宮で何かの展示の催しがあった時に、橋本さんと一緒にお供をした台北の美術商で買いつつたんですね。実は揚州八怪は山水画が非常に少ないですね。董其昌が「山水画というものは伝統に従ってまねる」ようにと言われて、言うのは易しいんですが、それに従うのはたいへん難しいですね。第一手本が入手できない。ですから揚州八怪には山水画がたいへん少ない。その店先ですね、これをご覧になってすぐさま「じゃあ、これを頂きましょうか」こうおっしゃられた。私は慌てました。確か、日本円で十四万円位でしたかね。左の方の金魚の絵とこのはですね、これは普遍的によくあるものです。「上海金魚先生」それだけで画家の手に手紙が届いたという逸話があるくらい流行していた。帰って調べましたら、右側の



図5 董其昌「傲米芾洞庭空濶図」部分 北京故宮博物院



図8 虚谷「倣漸江山水图」橋本コレクション



図9 虚谷「金鱼图」橋本コレクション

虚谷の絵は非常にいい絵なんです。改めて橋本さんの慧眼というか収集のキャリアに敬服した思い出があります。

【図10：石濤「山水图」冊之二】私が橋本さんのところに出入りするようになってからしばらくして、お手持ちの石濤「杜甫詩意冊」を原寸大で複製で作ったら、そういう話があったのですが、当時から私にはこの画冊の真偽が分かり判りませんでした。一九六七年ですか、ミシガン大学のリチャード・エドワーズ先生が、中国個人画家の展覧としてはアメリカで初めてだったんですけれども、石濤の展覧会をしてから石濤ブームが起きました。これはその画冊のなかの一枚です。題字に特徴があります。癖がありますね。この丸い文字はね、全部だめなんです。当時それが判りませんで、気に入らない、解説は絵を見ながら全部私の乏

しい学力を尽くして書きました。エドワーズさんは絵そのものについて書いて大変礼賛しました。

後に安徽の黄山でシンポジウムがありました。三百人以上、もともとたかも知れませんが。要するに小学校の校庭で映画をするのと同じような感覚で、少し詰めの状態の講堂で、シンポジウムがあったんです。その時、会場を変えて、安徽派の展覧会があり、石濤の絵が十六点並んでいたんです。私はもう全部だめだと思ったんですけどね。エドワーズ先生に言っ、全部難しいんじゃないか、と申しました。ところが、その十六点の中でですね、中国側で一番名画と言われるのは、この丸みの文字なんです。

【図11：石濤「山水图」冊之二】これもそうです。この丸い字が「いけない」と言い出したのは、まだメトロポリタンと契約はしていなかったウエン・フォンというプリンストン大学の先生でオリエント・アートに書かれておられて、私もその通りだと思ってウエン・フォンに追隨したわけです。ところが会場で一番の傑作がこの丸い文字の画、これがいい、ということで私茫然としました。

【図12：石濤「山水图」冊之三】これも橋本さんの画冊の一枚で、石濤と別の絵描きなんです。私が判らなかつたのは、一つの画冊の中に二人の画家の画が混じっていたからです。これはさっきの丸い文字の画家とは別の画家が混じっています。その丸い文字の絵の画家が、調べていくと80点以上あるんです。そうすると、これはもう偽物とか何かじゃないかと、独立した一人の画家として扱うべきものですね。

【図13：石濤「山水图」冊之四】これも別の絵描きで「大滌子」という落款があつて、偽物の作者が段々と歳をとるとね、石濤が老いていくのと同じなんです。長い年月の偽物の制作が、こういう現象を生みました。弓野 いくつかの絵画をめぐって、思い出や橋本コレクションと関わりをお話いただきました。では次に、先生方が参加されておられました研究会の様子を詳しくお伺いしたいのですが、山岡先生いかがでしょうか。山岡 小生は日本の狩野派の絵を研究していたのですが、いきなり橋本



図10 石濤「山水図」冊之一 橋本コレクション



図11 同二

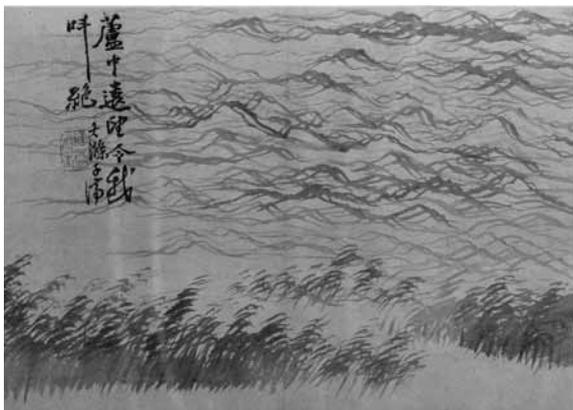


図12 同三



図13 同四

さんのところへ連れて行かれて、中国の明清の書画を見せられました。宋元の絵というのは禪宗で好まれていたから、小生もある程度は習っていたのですが、明清のものは誰も教えてくれませんでしたから、さっぱり分からなかったのです。美術は、講義を聞いたり、展覧会を見たりしただけでは分からないところがあります。

だから僕は色々考えて、結局よく分かる人の見方の真似をする、これが一番いいと長年の経験で思いついた。曾布川君は明清画を良く分かっていて、僕の場合と全く違う訳ですけど、もしこの絵を見て僕が曾布川君だったらどう言うか、どう考えるか、そういうふうにする。彫刻でも、焼物でも。良く分かる人は独特の感覚を持っているわけです。だからそれを真似をして、彼はこれはいいと言うだろう、これは悪いと言うだろうという風に真似すればいいのではないかと。

美術の教育も、博物館で良く分かる学芸員について歩いて、ああだこうだと言ってもらくと、初めて分かるんじゃないかと思えます。本を読

んだり、ちょっと展覧会を見たくらいでは、なかなか分からない。そういう意味では、僕は橋本さんとここでさんざん訓練を受けましたから。古原さんがいいと言えば、古原さんの見方で見ようとしたのです。人間は人の眼を借りて見ることができると思っています。小生は、美術史で一番大事なのは、自分の見方に固執しないことだと思います。

橋本さんの研究会というのは、面白い研究会で、粗末な蔵の中に何百点という名品が入っているのですが、我々が行ったり、あるいはお客が来たり、見たい人が来ると、もう何十点と出されるんです。家も古いいい家でしたけど、部屋が四室あって、全部各部屋の間仕切を取り払って、天井にレールをつけて、一度に何十幅も掛けられるようにして、そこへ勝手に蔵から絵を持ってきては掛ける。大きい丈長のもものは天井の高い応接間に掛ける。そして一通り見たり議論したら、返して取り替える。それが雨が降ろうと、風が吹こうと、庭を軸を何幅も抱えて、走って運ぶのです。橋本さんは、濡れるから悪いとか、荒っぽくやつちやいかん

とか、そんな事は全然おっしゃらなかった。好き勝手にみんな広げて見ていましたから、非常に勉強になりました。

橋本さんはコレクターを養成しようという気持ちがあって、僕の知っている人も、一々橋本さんの判断を仰いで大きなコレクションを作り上げました。橋本さんは、例えば呉昌碩とか斉白石、あるいは虚谷など、なかなか手に入らないものを安く譲って、コレクションを充実させようとされました。ところが、その人は事故で亡くなって、そのコレクションはどうなったが分りません。橋本家で見慣れた作品もいくつかありましたが、それもなくなりました。

橋本さんが京都の骨董屋さんに、錢杜という清末の絵を狙って買いに行かれたことがありました。僕はついていったのですが、武丹の山水があつて、「橋本さんあれいいですね。あれも見られますか」と言ったら、「お前買いたいののか」って言われましたね。それで僕も行きがかり上、「はい、買います」って言ったら、そしたら「おお、そうかっ」とうれしそうに言つて、それで二点を買つて、骨董屋さんに「これ二点で幾らにまけるか」と言つてまげさせて、まけた二点分を僕の方の値段から引いてもらいました。それが小生の中国画購入の第一号でした。

その後、安いのを買う時は、橋本さんは「勝手に、好きなように買え」と言われる。いいのを買って持つて行くと、非常に喜んでくれました。悪いのを買って持つて行くと、「己が性の拙さを泣け」とか何とか言うから、「それは何ですか」と言うたら、「お前、芭蕉の『野ざらし紀行』を知らないのか」と。富士川だったかで、芭蕉が三歳ぐらいの捨て子を見た。そして「猿の声を聞く人、捨て子に秋の風いかに」という句を読みますね。芭蕉は、食べ物その子のそばに置いて、お前は父親に憎まれたのではない、母親にないがしろにされたのではない、これは天の、お前の性だ、と言つてそこを立ち去つたという。その拙き性という事が出てくる訳ですけど、そう言つて橋本さんは喜んでいました。橋本さんはアララギの歌人で、齋藤茂吉の直弟子です。のちに新短歌に移つて指導者になり、象徴的・抽象的な和歌を作られました。まあ、そんなこん

なで、僕はついどんなに買おうようになって、それで橋本さんが亡くなってからも益々買おうようになって、つい最近自分で展覧会をやつたんですけども、これがいい加減なもので、己が拙き性を毎日泣いていような始末です。

**弓野** 山岡先生は去年郷里にお近い笠岡市立竹喬美術館で御所蔵品の展覧会をなさいました、大変なコレクターでございます。次に曾布川先生に研究会のメンバーとして別の角度からお話を願ひましょう。

**曾布川** 今の山岡先生のお話にもありましたけれども、研究会といつても、別に誰かが研究発表するとかいうことではなしに、まあ勉強会といつた方がよろしいですね。蔵から作品を出してきて、それを皆で見るといふ形式でした。ただその作品の点数が半端ではなくて、一回研究会をしますと、始まる前に三、四室の部屋一杯に作品を掛けておくのですが、後で色々注文が出たりしますので、それこそ二回くらい掛け替えて、五、六十点は出してくる。その出してくる役を山岡さんと私が仰せつかつたというわけです。でも、お蔭で随分勉強させていただきました。要するにものというのは、この場合書画の作品ですが、自分で手に触れて掛けたりしまつたりする、そういう作業を通じてその作品に対する愛着を増し、作品を覚えるというわけです。ただそういう機会というのは、最近本当に少なくなつて、今の学生さんたちはかわいそうだと思いますね。やはりそういう経験は是否とも必要だろうと思います。

私は大学の研究所におりましたので、暇といひますか融通のきく自由な時間が多いわけです。すると橋本さんから電話がかかつてきて、ちょっと来てくれないか、と度々頼まれました。それで高槻のお宅に参りますと、多くはお客さんのために作品を蔵から出してやるのが仕事でしたが、時に橋本さんが最近購入したものとか、ずつとしまつておいたものを出してきて見せてくれる。橋本さんはちよつと悪い癖がございまして、人を出し抜くというか、あつと言わせるのが好きだつたようで、びつくりするようなものが出てくることがありました。文徵明の山水図巻とか金冬心の梅の図巻が出てきた時も、随分驚かされました。



山岡泰造氏・曾布川寛氏・弓野隆之

私自身は橋本さんのところへ参ったのが比較的遅く、ちょうど橋本さんが近百年と云って、近現代の書画を集めている頃でした。その頃のことですから、作品が次から次へと入って来て、そのたびにびっくりさせられました。私もこれまで見たこともないような作品に興味をもち、その頃、近百年の絵画については随分調べました。当時は近現代の絵画に関しては資料が乏しかったのですが、それでも研究所には若干の資料がありましたので、それらの画家について調べるのが私が仰せつかった役目でした。その意味では、作品を集める橋本さんと見せてもらおう私とは、持ちつ持たれつの関係だったと言えます。

コレクションと言っても様々なコレクターがおります。ちょうど今、中国書画をたくさん収蔵する関西の九つの美術館、博物館が集まって関西中国書画コレクション研究会を作っているわけですけれども、それらはみな有名なコレクターたちが集めたものばかりです。橋本さんの場合は、住友寛一さんのように似たコレクターもおられましたけれども、ご自分も研究者であったという点で、少し異なっております。お金だけ出して他人任せでコレクションを作るのではなく、ご自分も研究者と同じように研究をしております。この点は是非とも知って頂きたいと思います。だからこそ、あれだけのものが比較的手頃な価格で集まったわけですから、先程、虚谷の漸江に做った山水図の話が出ましたけれども、橋本さんとしては、虚谷の絵画は何点か所蔵してよく知っておられましたから、こ

れはと言う作品に出くわせば、迷うことなく直ちに買い取っただけのこととあります。

有名な話ですが、橋本さんに「ノート」というものがありました。「ノート」は現在もコレクションとともにお孫さんの橋本太乙さんによって大切に保管されておりますが、所蔵作品に関する全ての、最新の情報が記されておりました。先程の古原さんの話にもありましたが、例えば金冬心の「冰雪之交」という梅の図の場合ですと、篆書で書かれた「冰」字の読みを古原さんに指摘されれば、すぐにそれを改めるといった具合です。ですから、「ノート」はほとんど書き直され訂正されていく。研究会を開いておりましたから、様々な情報が入って来て、その都度、紙を貼って書き直していくというわけです。このように他のコレクターとは違うところがありました。その点を知っておいて頂きたいと思っております。

**弓野** 次に尾崎先生にお伺いしましょう。尾崎先生はコレクターとして、先程の山岡先生のお話とも関連するかも知れませんが、収集のことについてお話しただければ、と思います。

**尾崎** 僕は書や篆刻をやっていた関係で中国絵画に興味を持ちました。先程の山岡先生・曾布川先生のお話のように、何か一点中国絵画を持っていきましました。そして橋本先生や曾布川先生・山岡先生のご意見を頂き勉強させていただきました。

橋本先生の言葉で、今でも心に残っているものがあります。それは「ある時、業者の方が家に来られ、文徵明や董其昌など有名作家作品など十数点持参。先生がそれらの作品を二分され、業者の方はっきり有名作家の山を買って頂けると思ったのが全く逆で無名の山の方を買われた」と。その時に教えて頂いたのは、「絵は名前前で買っては駄目だよ。物で買わなければ」です。

僕なんかお金が無かったので、一つの絵を買う時に、よく調べ、よく考えて買うようにしています。先生はもう一つ、「お金があってもいい絵は買えない、無い方がいい絵が集まる」と言われました。

僕は篆刻交流でその頃よく中国に行っていました。上海・蘇州・杭州

などには必ず文物商店があり、沢山の中国書画がありましたので、特に扇面の書画が安価な事もあり、時々買いました。帰国してからそれらの扇面を先生のところに持参すると、「いいものを買ってきたね」と誉められました。先生には感謝しております。どうも有難うございました。

**弓野** 尾崎先生は色々なコレクションをお持ちで、当館で以前行った展覧会でもご出品いただきました。では西上先生、博物館・美術館のお立場から、近代のコレクション等についてお話を伺えればと思います。

**西上** 私は明末清初、中国の十七世紀頃、先程石濤とか出ておりましたけれど、そういうものに当初は関心を持っておりまして、今もその辺りを中心に研究しております。ですから橋本さんがお集めになっていたものとも結構時代的に関わりを持っておりました。私が橋本さんのお家にお伺いした勉強会では、すでに曾布川先生・山岡先生が部屋の中に作品をどんどん掛けてくださっていました。それから「ノート」を拝見して、私も見たいのがあれば、ということ、掛け替えて頂き、勉強させて頂きました。

近代の絵画については、参加者の希望に合わせてお出し頂いたという事もたまにはありましたけれども、大体はやはり明末から清初にかけての作品が多かったと思います。ただ虚谷や呉昌碩・任伯年等の面白い作品が出ておりまして、今になってみると、近代の方でも特に選ばれて集められていらしたんだなあ、という気が非常にします。山岡先生にお聞きしますと、近代の作品については足りない部分を奮発して買っておられたようですので、掘り出し物を見つけてくるというのではなくて、やはりいい物は本当に狙って集めておられたように思います。

大阪市立美術館に勤めておられて今の東京文化財研究所にいかれました、私の大学の先輩になります鶴田武良氏、亡くなられてしまったのですけれど、やはり橋本さんの近代のコレクションを見られて、それで大阪市美、ここで中国近代絵画の本当に魁となるような展覧会をなさいます。それから段々と近代絵画に対する世間の関心も加わっていったのではないかな、という気がしております。

今年の初めになりますけれど、「中国近代絵画と日本」という展覧会を京博で催しましたけれど、そのなかでどうしてもそれをお借りしないと展覧会が出来ないような作品を橋本さんのコレクションからお借りしました。その辺はやはり先見の明を持っておられたなあ、という気がします。

**弓野** この春、京博さんで行われた「中国近代絵画と日本」は素晴らしい展覧会でした。御覧になった方も多いのではないのでしょうか。

**古原** この絵を幾らで買ったかというお話は一度も聞かされたことがなかったけれども、さっきお示した沈南蘋の兎の絵は、丁度お庭の南側に三軒家があつて、それと同じ値段だったそうです。思い切つてその家を会社の社宅として買おうか、それともこの兎を買おうか、随分迷つた、とおっしゃいました。その頃でも家は安くはなかったと思うんですけど、そういう値段だったそうです。まだ私はこの絵を鮮明に覚えておりますが、丁度その日に日本刀を持ち込まれた。橋本さんは中学生の時に日本刀を買つてお父さんに怒られたそうです。ところが私の目の前で目釘というんですか、それを外してバラバラにして…その手つきが鮮やかなので、大変感動したのを覚えております。

それからもう一つ、その兎の絵を応接間にかけて私にお話になった時に、「実は昨日大阪市立美術館へ行つて（もう亡くなられた）西村館長（当時）先生に君の就職のことを頼んできた」こう言うんですね。で、どういふ話をされたのか知りませんが、「橋本さんが」ずっと話をしている間、館長先生の頭がだんだん下がってきて机に額が着いた」って言うんですよ。それでも、橋本さんは話はやめられなかった。ですから、もしもあの時に何か人事がおこっていたなら、今司会をされている弓野先生の先輩としてここで働いていたのかな、という気がします。

**弓野** それでは、橋本（太乙）さんに、今のお話を受けて一言頂きたいと思ひます。

**橋本** 今の古原先生の話で聞いたことは、戦前五万だそうですよ。ということとは戦前に家三軒、三十坪位の家が三軒で五万で買ったということですよ。ただ今と違つて不動産はそんなに高くない。今の三千万円、相当

当時としては高かったと思います。

古原 橋本さんはお酒を飲まなかったですか。アルコール会社の社長さんっていても僕はご一緒にいて酒を飲んだこと一度もないんですね。飲まれましたか。

橋本 祖父は飲んでいましたよ。

古原 そうですか。

橋本 歳をとって喘息がすごいので、六十歳の時にはもう酒は飲みませんでしたけれども。煙草も吸っていましたし。お酒も、お付き合いというか、飲んいでたようです。結構宴会芸も上手でしたよ。孫に折り紙を教えるにしても、宴会芸でお箸か何か使って色々なことをやるにしても、意外と器用でした。

古原 ラジオの交通情報を一所懸命聞かれて、自分の会社のトラックが事故を起こさないか大変心配されていた。定年で辞めてから、奥様が「実によく眠るようになった」とおっしゃっていました。責任感の強い方だったな、と思います。

橋本 先程（の講演で）言い忘れましたが、祖父が代表に選ばれた件で私が聞いたのは、「私には実力が全くなくて運だけで社長になった」と。今トラックの話が出ましたけれど、実際タンクローリーが蓋を開けたまま走った事があります。又、工場の中にある排水溝にガソリンが漏水していて、原発ではないですけど大変な事故になる一歩手前。でもその一歩手前で助かったところが、うちの祖父のすごく運の強いところじゃないかと。何かそういう時に予感があるのでしょうかね。祖父が最初に気が付いたそうです。外に運動場みたいな敷地があるのですけれども、そこに湯気が出ていたそうです。あの湯気は何だと思っただけで気が付いたのは、ガソリンが大量に出ていたという、工場が大爆発する一歩手前だったというんですね。やっぱり運が強かったのかも知れません。万が一、今美術品を扱っておりますけど、万が一は、万が一ではない、万に一つ必ず起こる事と思っております。

古原 私が最後にお目にかかったのは、高槻市駅前の大学病院の個室で

した。御自宅の玄関先で顛倒されて、以後意識の戻ることはなく、昏々と眠っておられました。看護婦が来て見せてくれた橋本さんの腕は、息を呑むほど痩せて細かった。同時に私が驚愕したのは、橋本さんが微笑んでおられたことです。もっともって世俗から、政府から賞賛と感謝を浴びてよい、ただ中国画を収集したという強大な自負と若い者の敬慕の情を一身に集められて、「それでよい」とでも語られているように微笑んでおられました。

最後まで橋本さんらしかった、明治の達人だったと、私は吐息をついて帰ってきました。

弓野 有難うございました。それでは最後に、曾布川先生から今回の展覧会について、お話をお願いいたします。

曾布川 今回、明清の絵画を、会期中に、前期と後期併せて二百点も展示致します。これは大変な数です。私たちが何十年もかけて見てきた作品が、一堂に会して見られるというのは非常に喜ばしいことです。ただ最近の世の風潮としては、中国のもの、なかでも中国の書画、なかでも明清の書画は、展覧会を開いても敬遠されるところがあります。とりわけ若い人にとっては余程取つきにくいものようです。このシンポジウムが始まる前に、二階の展示会場を一巡しましたけれども、やはり第一室には錚々たる作品が並んでいて、日本でこれだけの作品をいちどきに見ることができるのは、滅多にないのではなからうかと実感致しました。ですから皆さんには是非ともこの機会にじっくりと見て頂きたいと思えます。と同時に、あいにく猛暑の時期ですけれども、他の方々にもせいぜい周知していただき、会場に足を運んでじかに見て頂きたいと思う次第です。

橋本さんのコレクションの内容につきましては、これまで他の方々が説明されましたように、もちろん明清画が中心であります。明代絵画は、先程浙派の絵画についてお話がありました。呉派の絵画も見ると作品がたくさんあります。文徵明の絵画作品は、日本では橋本さんのところだけではないでしょうか。文徵明の末裔も、非常に珍しい作品が集ま

っております。

それから明末清初の絵画がよく揃っており、これは橋本コレクションの大きな特徴であります。遺民の絵画はもちろんですが、先程、味岡義人氏の発表の中で奇想派という言葉が出てきました。奇想派というのは、ケーヒル氏のいわゆるエキセントリック絵画のことで、これは別に誰かに教わったというわけではなく、ケーヒル氏に先駆けて集めたものです。むしろケーヒル氏が橋本さんのところで呉彬などの作品を見て、影響を受けたといった方がよろしいかと思えます。橋本さん自身の好みにも合っていたようで、呉彬にしても、米万鍾にしても、丁雲鵬にしても、作品が良いというだけではなく、大幅の名品揃いです。

また、明末清初の時代では、私は「江南都市絵画」と称しているんですが、要するに明末清初の時代に江南の大都市を中心に栄えた絵画スタイルのことで、午前中に発表のございました藍瑛の杭州派だとか、揚州派、或いは南京の金陵派だとか、或いは華亭派ともいいます松江派だとか、都市ごとに独自性を発揮したスタイルの絵画が実によく揃っております。これは橋本さん自身が蒐集の過程でお気づきになり、意識的に集められたものだと考えます。これらの絵画も丁寧に見て頂きたいと思えます。

それから来船画人の絵画は、橋本さんのコレクター気質が遺憾なく発揮されたものと言えます。来船の画家の絵画を全部集めるんだと意気込んでおられました。この蒐集が本格的に始まったのはそれほど早くはないのですが、京都の骨董屋さんに、こういう作品があったら一報するようにと情報を流して、集められたわけです。その結果として、単に来船の絵画をたくさん集めたというだけでなく、これまで知られなかったたぐさんの来船画人たちを発掘しました。要するに集めるとなったら徹頭徹尾集めるといって、まさにコレクター気質といえますか、それが遺憾なく発揮された例だと思えます。

最後に近百年、即ち近現代の絵画も一大コレクションを誇っております。橋本さんのいう近百年とは、アヘン戦争以後の百年のことですが、

これも非常に熱心に集められました。ちょうど時期としては、大陸において文化大革命の時に紅衛兵が民間から没収した絵画が海外に放出された頃に当たります。これらの書画は一応鑑定を経ておりまして、彼等の革命にとって必要でない作品、つまり民国時代の上海の、彼等からすれば退廃的と思われた絵画作品を外国に放出したわけです。これには中国の財政事情も関係していて、日本など海外の国々と交易しようにも、輸入はするけれども支払うべきお金がない。そこで毎年開催された広州交易会などでは、お金の代わりに書画の作品をトランクに詰めて支払うという一種のバーター貿易が行われたのであります。いずれにしても、非常に大量の作品が日本に流れて来ました。それを橋本さん独特の「機を見るに敏な」コレクター気質の感を働かせて集めたんですね。当時の作品は、貿易を行う商社にまず入って来るんです。商社の蔵にいったん入り、そこから物産店やデパートの即売会などを通して全国に捌かれていったわけです。そこで、橋本さんはまた機転を働かせて、大顧客ということで商社の蔵に入らせてもらい、店に流れていく前に作品を一点ずつ点検選別し、ご自分の眼になかった作品だけを購入するという手をとったわけです。そのお伴をさせられたのが私たちで、本当にいい勉強になりました。もちろん橋本さんの近百年絵画はこれらだけでなく、呉昌碩や齊白石の作品のように初期に蒐集されたものも数多くあり、実に充実しております。これらも是非ともこの展覧会で御覧頂きたいと思えます。